

「子どもの貧困」をどうとらえるか —格差社会を断ち切る学校の役割

中西新太郎

「あたしの家は市場とか駅に近い町中にある、ボロボロの公団住宅の一階だった。薄暗い1LDKの奥の一室を兄が——兄の体と、膨大な本とゲームとよくわからない人形が——占領していて、わたしは母と一緒に広めの台所に机をおいて、夜は布団を敷いて、生活していた。

今一番欲しい物はって聞かれたら、あたしは迷わず自分の部屋って言うと思う。一人きり過ごせる場所だ。 そのためには、実弾がいる。

十三歳のその夏、あたしはそのことしか考えてなかった。」

(桜庭一樹『砂糖菓子弾丸は撃ち抜けない』 富士見ミステリー文庫)

1 放置とユースフォビアのなかで——構造改革時代の若者をとらえるという課題

→子ども・若者が「普通に生きる」ことが難しい受難の時代がやって来たという事実

→「社会の片隅でひっそりと生きる」子どもたちの逼迫は、家庭内に困難が押しこめられていること（ワーキング・プア、虐待）、自分たちの苦しさを社会との関係でとらえられないこと、の点で、依然として隠されている。

→統治・国家の視点からみた子ども・若者像——統制的青少年観への転換

厳罰スキームとその背景

子ども・若者にかんする建前としての統一的像はフィクション化し、「よい子ども」と「悪い子ども」への区分がなされていること

→若者は「善良」なのか「危険」なのかにかんする社会の視線の両義性

→この状況をどう受けとめ、子ども・若者をどのような存在としてとらえるのか、どのようにして「未来を拓く存在」になりうるのか——子ども像・若者像の新たな構築が求められている。

2 子ども・若者の貧困をどうとらえるか

○大衆的貧困——想像を超える貧困の規模・広がりをとらえること

「モンスターペアレント」論議の陰に——私たちの想像をこえた貧困のすがた

→若者がワーキング・プアに陥るのはなぜ？」

劣悪で不安定な非正規雇用の拡大

→初めて就いた職が非正規雇用、2002年～07年では43.8%、10年前の2倍に（厚労省「就業構造基本調査」）

民間企業労働者の37.8%が非正規社員（厚労省「就業形態の多様化に関する総合実態調査」2008年11月7日発表）であり、若年層なかでも若年女性の非正規雇用の割合は半数近くに達し、「社会人」として生きる保障、基盤が剥奪されている。

○社会の入り口で立ちすくむ——進路指導・キャリア教育とは無縁の若者たち

高校授業料免除世帯の急増と働く高校生

アルバイトも戦力

貧困な若者がたどる就労、職業経歴にはどのような特徴があるか

→「非行」「逸脱」というかたちで生きられる貧困／「非行」「逸脱」の裏にひそむ貧困息を呑む絶望的な状況のなかで生きるということ

○「婚活」流行の真相——貧困のために「普通の人生」を奪われる若者たち

上昇し続ける30代男性の未婚率

結婚して子どもを育てるのに必要な年収は？

20代、30代の若者たちでは、「結婚できる層」と「結婚できない層」とのはっきりした格差が生まれている。

若年層転職者100万人の時代／勤続志向が高まっているのになぜ若年層転職者が増加するのか？ →30歳の壁

「婚活」流行の背景にはライフコースの閉塞が存在している！

○社会的孤立と排除という貧困——関係資源を奪われ、一人で生きる。

→家族単位の孤立／モンスター・ペアレントの一例として挙げられた、「お金貸してよ」。
地域社会、保育所・学校などの公共組織が「最低限」として想定する振る舞いに応えられない状況が社会からの隔離を生み出す。

家族の解体、逆に離家ができない、

→広域移動を強いられる若年労働者の孤立 →アキハバラ事件を例に

→さまざまな働き方が混在する職場の現実が強い孤立 ex.チェーン店型ビジネスモデル

○青年政策の欠如

「若いのだから働きさえすれば生きてゆけるはず、うまくゆかないのは努力していない証拠」という若者観と公的支援の欠如

公的セーフティネットの弱さを家計、貯蓄で補う関係

社会に支えられる経験を持たない若者たちが「社会的関心」を持たず、自分の願望、要求を社会に訴え、広げにくいのは当然であること

3 自己責任「論」はどこからやって来るか？

○私的所有の世界を内面化するという事

日常生活のなかで、「それはお前自身の責任だろ」と「自然に」そして「当たり前」のこととして判断することが山のようにある。

→生活の内側から絶えずはたらいている自己責任の思想

行為(能力発揮)主体、選択・交換主体としての個人と現れた行動・発揮された「能力」や選択・交換された対象との関係を「私的所有」として一元的にとらえていること

- 私的に所有できない対象とその範囲はどのようにとらえられるか？
現実生活に豊富に存在している非私的所有の世界
それにもかかわらず、非私的所有の世界がみえなくさせられるメカニズム

○新自由主義思想が肥大化させる自己責任のエートス

- A社会生活のあらゆる領域を市場競争の下におき（市場化）、資本の利潤獲得機会を可能なかぎり（グローバル規模で）拡大すること
- B社会のあらゆるもの、ことがら、関係を「私的所有」の原則にもとづいて扱い処理すること
- Cこうした原理にもとづく社会秩序に従って行動するよう強制する「強い国家」の必要

言葉ではなく政策のなかにつらぬかれている思想が、自己責任のエートスを社会に浸透させる。 →介護保険方式、障害者自立支援法、健康増進法、食育基本法、メタボ…

○応益負担型人間像

- 社会にコストをかける存在としての子ども・若者
「コストをかけないこと、リスクをあらかじめ排除すること」が新自由主義型社会の形成原理であること。ところが、人は生まれながらにして社会に負債を負う（コストをかける）存在であり、返済能力を証明する義務がある。
- 「無能力」＝無所有の罪
社会に評価される「能力」を何も持っていない人間は、社会にとっての「害毒」となる。
この考え方の前提としてある個体能力観

○文化的個体化 cultural individualization の進行

- 「クラスの中では漫画の話をするグループと、芸能人の話をするグループ、音楽の話をするとか、いろいろ分かれている。他のグループの子とはほとんど話をしない。」
- ケータイというコミュニケーション・ツールが象徴的に示す個体化のすがた
- 消費文化は必然的に文化的個体化を進行させること
→個体化状況を生きる子ども・若者にとって、社会はみえなくなる。

○依存しないことが自律/自立か？——自立・自律像の錯誤

- 社会を頼らせないこと、援助を求めないこととしての自律VS さまざまな関係資源を利用/動員するネットワーク形成手法（共同の戦術）としての自律
- 自立支援型政策の意味
文句を言わず社会の下層で生きることを受忍させる「自立支援」
個人に責任を求める社会のあり方そのものへの問い直し、批判を封じる機能
- がんばること、一生懸命生きることが社会的共同を豊かにすることと矛盾してしまう現実
- 社会的自立にかんする錯誤
たとえば、「ニート、フリーターになってはダメ」という感覚を無意識のうちにつたえていないか？

新自由主義社会が強いる自立の基準にたいし大人は自覚して批判的であるか？

○教育における個性化要求の意味

子どもの「でき」を測る対象の拡大

→外的結果のみならず内面の評価へ／学校・教育次元での能力のみならず「人間の価値」の評価へ

→成績としてみえる競争から、網の目のように張り巡らされたみえない競争へ、競争のかたちが深化する。

「貧しさ」も「障がい」も、趣味・嗜好も、ひいては本人の「キャラ」も、そうした競争の戦場に組みこまれ、個人の価値がそうした競争の尺度で測られる。

4 「生きづらさ」を生きる矛盾と葛藤に寄り添う

○孤立に耐える

→夢を持たない・語らない・気取らせない

自分の苦しさを受けとめてもらうことの難しさと他者の苦しさに鈍感であろうとする努力とが、子どもたちの感情を仮装させる。「何があっても平気でいられる心」を鍛える。

本当に苦しいことは誰にも話さない、話せない子どもたち

→リスクの事例、あらゆる「欠損」や「弱さ」を排除の対象とさせないための高度な文化的熟達

→自分を仮装する文化

「いつも明るく元気」なすがた

→「努力のかいあって、自分はだいぶ“人間”のフリがうまくなりました。周りの人たちは、自分のことを、明るく楽しく、優しい人だと言います。」（野村美月『“文学少女”と死にたがりの道化』ファミ通文庫

○競争状況を防ぐ——群生態としての「社会」

→群生態とは？ →居場所を確保するセキュリティ機能としての友だち関係・人間関係

→「相互配慮の人」としての若者たち /黙ってにこにこしているだけでは嫌われる。

→人間の価値に序列を付ける競争から逃れるための努力が新しい序列を生み出す。

群生態としての社会を示す「～系」という言葉 →それぞれの人間がぶつかっている困難を社会から切り離すとともに、集団単位での差別的関係のなかに位置づける。

○「社会が悪いんじゃない、だれかを恨もうとは思わない」となぜ思うのか？

「貧困はあなたのせいじゃない、孤立はあなたのせいじゃない」とつたえるだけでは生きづらさを突破することができない。

→どこに矛盾、葛藤の核心があるかをつかまなければ対抗の軸がみえてこない

「私がこれだけがんばって耐えている・耐えてきた」「ひどい状況と言うけれどそのなかでがんばってきたから私は何とかなった」 →成功型の自己責任受容

「ダメだったのは結局私のやる気、力がなかったからで、誰かをせめても、社会を責めてもはじまらない。」 →失敗型の自己責任受容

→「自分の生の価値を自分だけでも認めたい」という願い、プライドの存在をみなければならぬ。自己責任イデオロギーは、「この支えを放棄すれば助ける」という二者択一を迫っている。

5 生存権を守るという課題と学校の役割

○子ども・若者の生存権を保障するという理念へ

→子ども・若者の人権をいま本当に守るためには、社会権の確保が必要であること

→「生きさせろ」という要求の理念的性格

無条件に「もの言う権利」、おかれた状況の不当さ、困難を表出する権利と受けとめる義務

○共在感覚——社会のなかに身をおけるようにすること

→「社会性」を訓練すれば社会人になれるのではない。「ともに生きる社会」の具体的すがたとして「ともにあること」のリアリティを私たちはどれだけつくっているだろうか？

→一人ひとりが持っている「弱さ」や「欠陥」を平等で安心できる社会（人間関係）を広げ深める社会的な「資源」としてとらえ直す。 →新自由主義的人間像の転換

○社会的自立像の組みかえ

若者の側に一方的に「こういう力を身につけるべきだ」と要求し統制するのではない社会化様式、自立過程をつくること

○最低限保障の政治と働き方の公正

→憲法25条の意義と機能/機会均等という観念の重要性→社会化への権利を含む平等主義へ

→生存権を保障するために緊急に必要な運動

→欠かすことのできない教育や進路保障、職業訓練における平等原則

→「非正規・夫婦共働き」コースを社会的自立が可能な水準とすること

→働き方の公正、人間らしい労働 decent work の実現を展望する

→グローバル資本主義に対抗する社会的経済の再生と社会・労働運動の課題

○学校は何ができるか、何をすべきか？

→自己を世界に開く経験を育てるとは？

若者たちが世界に直面する回路の多様化を踏まえたインターフェイスの発想を

→彼らがどのように自己を開き、閉じているかを彼らの社会文化環境にそくリアルにかむこと

→労働者として生きるために必要な知識をどのようにつたえているか？

若者たちの現実にそくして「本当に必要な知識」をつたえること

「貧困になるのはあなたの責任ではない、社会の責任だ」ということを、人類社会がたどりついた知恵として、しっかりつたえること

誰かに頼る「頼り方」を知らせること

- 広い意味での労働・職業教育と職業訓練にかんする具体的な知識をつたえること
- きびしい現実のなかで若者たちが「何とかやってゆく」やり方を社会的共同へとつなげる運動と回路の重要性

○20世紀の夢から「もう一つの夢」へ

〔参照文献〕

高山智樹・中西編『ノンエリート青年の社会空間』大月書店2009年9月

「内面化される〈生の値踏み〉――蔓延する自己責任論」（鼎談／湯浅誠・河添誠・中西）河添誠・湯浅誠編『「生きづらさ」の臨界』旬報社2008年

中西(共著)『格差社会とたたかう』青木書店2007年

中西『〈生きにくさ〉の根はどこにあるのか 格差社会と若者のいま』JRC2007年

中西『フツーをつくる仕事・生活術 28歳編』（監修）青木書店2007年

中西『フツーを生き抜く進路術 17歳編』（監修）青木書店2005年

中西「青年層の現実にもくして社会的自立像を組みかえる」（佐藤洋作・平塚眞樹編『ニート・フリーターと学力』明石書店2005年）

【MEMO】

<講師紹介>

中西 新太郎 なかにし・しんたろう



○略歴

1948年生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士課程単修了後、鹿児島大学教育学部勤務を経て、1990年より、横浜市立大学勤務。現在、横浜市立大学教授・国際総合科学部人間科学コースにて現代日本社会論を担当。

○専門領域

現代日本社会論・文化社会学。オウム真理教事件をきっかけに、1970年代半ばから進展した消費社会化が子どもや若者の成長・社会化に及ぼす影響について研究をすすめている。就職や進路指導にかかわる諸問題、青少年の非行・逸脱にかんする研究も行っている。90年代後半からすすんだ社会変動と格差・貧困化のなかで青少年の働き方がどのように変化しているかについて検討している。

○最近の著書等

『ノンエリート青年の社会空間』（編著・大月書店）、『子どもの貧困白書』（編集委員・明石書店）、『〈生きづらさ〉の時代の保育哲学』（ひとなる書房）『1995年 未了の問題圏』（編著・大月書店）『格差社会とたたかう』（共著・青木書店）、『平等主義が福祉を救う——脱《自己責任=格差社会》』（共著・青木書店）『若者たちに何が起こっているのか』（花伝社）、『フツーを生き抜く進路術 17歳編』（監修）（青木書店）受験競争から教育競争へ』（吉川弘文館『日本の時代史28』）など。